

シンポジウム 藤樹・二洲・篤山

～郷土の先哲に学ぶまちづくり人づくり～

日 時：平成22年11月7日（日）13：30～

場 所：西条市総合文化会館大ホール

基調講演 『人間の可能性を信ずること』

講師：吉田公平（東洋大学文学部中国哲学文学科教授）

江戸時代全体を考えたとき、瀬戸内海の両岸、岡山、広島、山口、徳島、香川愛媛は日本の物資を輸送する一大ルートであった。陸上交通は幕府の政策であまり使えなかった。大きな川に橋は造らない。山にトンネルは掘らせない。下を歩いたら不便だから船を使った。

そういう海上交通が物資輸送の中心であった時代に、瀬戸内海は物を運んで人も情報もよく動いて沿岸は豊かになった。豊かなところには優れた文人、学者が多く出た。

愛媛というのは文化の盛んなところであった。その象徴として今日の演題である篤山さんも生まれてきた人である。

世の中が大きく変わるのは江戸時代以後である。どう変わったかということでは象徴的なのが、国内戦争が無くなったということ。戦争が無くなって明日に向かって生きられる、幕府のおかげという感謝の気持ち・感覚が江戸時代に生まれた。

およそ270年江戸時代は続く。幕府は厳密にいうと今でいうところの中央政権とは少し違うが、とにかく国全体を仕切る機構ができた。一つにまとまって国内戦争がなくなった。明日に向かって生きられるという自信を得られたのは江戸時代からで、それ以前は違う。

江戸時代以後、小さなトラブルはあるものの中国、朝鮮半島あるいは琉球王府との安定した外交関係が続いた。

その恩恵として大陸、朝鮮半島の情報が大量に持続的に入ることになる。最初にその情報の波を受けた世代が林 羅山といった人たちだった。

17世紀初期の知識人たちの物を読んでみると、自分たちは中国なり朝鮮半島の文化のレベルや情報の豊かさ高さ、すぐ近くの国の人たちはここまで考えていたのに、自分たちはあまりにそれを知らないまま今まで過ごしてきたという

ことに愕然とする。

長崎などを介して中国の書物などが大量に入ってくるが、そこに書かれた内容は、それまでの日本人たちが知らないようなものばかりだった。

それで林 羅山は、寝食を忘れて情報収集にあたったということが、彼自身が書いた日記に記されている。彼の24歳のときの読書日記には1年間で240部読んだという記録が残っている。

最近の若い世代は電子情報に夢中になって、本を全然読まなくなったと嘆く時代になったが、情報の入り方が全然違う。

そこで世界はこうなんだということを知らされて、日本一国の中で縮こまっていたってしょうがないんだという驚きもあるのだが、それ以上に非常に大きなインパクトを与えたのが、人間そのものをどのように理解したらいいのかという、それまでの日本人の考え方に大きな転換点をもたらすような学説を真面目に受け止めることになったということである。

それを最初に吸収して自分のものにしたのが中江藤樹である。

中江藤樹の生まれた時代より少し前は戦国時代。隣から攻めてこられたら、明日自分たちが生きていられるかどうか確かめられない、そんな時代だった。

そのような時代を生きた人は、今自分はどのように生きているが明日はどうなるか分からない。

自分の行く末をどう考えるかという二つある。一つは死んだ後に救われたいという浄土宗、浄土真宗の教え。もう一つは今日一日さえしっかり生きていればいいんだと言う禅宗の教え。ところが儒教はそれらの教えとは違う。

儒学について、林 羅山やその先生である藤原惺窩という人は、知識のレベルで驚いたが、中江藤樹は知識ではなく生き方の導きとして驚いた。これからは一人の人間として生きられそうだが、殺しの訓練ではなくて平和なときに一人の人間としてどんなに生きたらいいのかを学ばないといけないと考えた。

また藤樹のおじいさんが偉かった。おじいさんは字が読めなかったがこれからは殺し合いの時代ではない、他者とともに生きていく時代になるんだ、剣術とかではなくて学問をしないとイケないと言った。ではその学問は何か。

学問という言葉の始まりはもともと中国の『孟子』という書物にあるが、学問という字を思い起こしていただきたい。「学びて問う」とある。問う力。

これまではこんなふうに教えられてきたが本当にそれでいいのか。いつの間にか身についてしまった考え方、生き方、世間に対するものの見方を根底から疑って再検討しようよというのが、学問という意味である。

学びながら生きる人のことを学者という。研究することを専門にする人のこと

を学者というのではない。学びながら生きる人のことを学者というのであって、今日ここにいらっしゃる人たちもみんな学者である。

天才という言葉があるが、あれは少数のスーパースターの事を言うのではなく、天賦の才能という意味を縮めたのであって、その人その人なりに生まれながらに持ち合わせている人間らしく生きる力のことを天才という。みんながそれぞれ天才なのだ。

中江藤樹は、知識として学んでいた林 羅山を「あの人はオウムだ。これまでこういう考えがあった、こういう説があったというのをちゃんと理解するのではなくて、鵜呑みにして分かったふうにして人に説き続ける、鳥のオウムだ。本当は何も分かっていない。生活に生かしていない。自分の生き方に重ね合わせていない」と批判している。藤樹はこういう人だった。

本日配布した資料に長野豊山と林 良斉のことを付け加えているが、長野豊山は川之江の人で尾藤二洲の弟子であり、近藤篤山と並んで二洲門下の優れた弟子と言われた。また林 良斉は香川県多度津の人だが、林 良斉が最初に学問をするときにインパクトを与えたのが長野豊山だったということで資料に入れている。

このように瀬戸内海の四国側のネットワークというのは非常によくできていて、同時代に儒学者を排出している。

同じ儒学者でも朱子学者、陽明学者というが、その根底にある「人間にはどんな力があるのか」を考えるのは実は共通している。人間の本質をどう考えるのかという事で共通している。

100年前の日本で何があったかを考えてみたい。いろんなことがあったが、人間理解の象徴的な事として、平塚らいてうの「青鞥」という雑誌が創刊されて、女性解放運動の旗印が掲げられた事がある。それから100年経った。

これはどういう意味を持つかというと、今の時代は西条市でもそうだと思うが、男女共同参画型社会で、男女は人格的にも社会的にも平等であるはず。平等なのが望ましい。行政も市民意識もそう来ている。それは違くと男尊女卑を唱えるような人はいないだろう。

ここまで来るのに100年かかった。これは大きな変化である。

いろんなことが起こりつつ、社会のシステムはまともな方向へと動いていると私は信じたい。この部分はたぶん変わらないと思う。

ただ科学技術の進歩が幸せの進歩に繋がるかというと、必ずしもそうではない側面もある。科学技術や機械の進歩は幸せのために役に立つ側面もあるが、人間を不幸に追い込むための道具にも成り得る。

インターネットや携帯もそうだが、そういうものを利用するときはメリット、デメリット両方あるんだということを分かった上で使わないといけませんが、人間観そのものを考えるときもそういう側面があるかということ、人の立場にもよるが男女平等という考え方自体は、間違いは含んでないと思う。

先ほど述べたように江戸時代、中江藤樹たちは死後に救われるからいいとか、今日だけ生きればいいんだとかいう考え方ではなく、皆が生きているこの世と一緒に幸せになろうよという考え方をした。誰もがみんなと一緒に幸せになるだけの力を持っていると、そういう人間理解を最初にしたのが中江藤樹。大変な人である。

そういう人間理解を何というのかということ、中国古代儒学者の孟子が述べた、人間の本性は善なのだという考え方にある。それを道德の徳、人間は徳を生まれながらにして持ち合わせているのだという。

徳という字は、道德という二字になってしまうとモラルという意味になるが、この場合の徳は力という意味である。みんなと一緒に生きる力、そのことを徳という。

人間として生まれるというのは、みんなと一緒に幸せになろうよと呼びかけあいながら生きていく力を元々持ってこの世に生まれてくる。そういう人間理解である。これを『性善説』という。自分だけが救われたらいいとか、死後に浄土に生まれて救われたらいいとかいう発想ではない。

私たちは恵まれてこの世に生きる命を授かったわけだが、造られたものではない。親は子を選べないし子も親を選べない。男か女かも選べない。こういうのを運命というが運命は引き受けるしかない。

ところが昔はその運命を差別して男はこうで女はこうでとか、差別が当然のことのように行われていた。差別というのは、今生きているこの世界を大前提にして考えるから差別というのがある。

この世に生れてきたとき私たち自身は、一人一人みんな違いはあるけれども、運命の元に与えられた違いは前提としながらも、誰もがそれぞれ人間らしくみんなと一緒に生きる力があるんだという考え方が性善説。ただし、これは科学的に検査をしたり解剖したりして検証したりすることはできない。信じるしかない。

ただ実際は、世の中には悪い人もいる。しかしそのような人でもその原因を排除してやれば、ちゃんと一人の人間としての側面を発揮するようになると考えた方がいい。マイナスの側面を社会現象としては承知しながらも、みんな本来は善なのだという考え方を性善説はする。

本性というのは本質のことである。本質は見えない。でも見えないことは一番大切である。そういう人間の本質的なものを善なのだと考える考え方。それを基礎として、日本において最初に若い人たちのカウンセリングを行ったのが中江藤樹である。

だから中江藤樹をすぐに陽明学者といわないで、私はカウンセラーとしての中江藤樹だと考える。

藤樹は若い人たちの相談において、一時のこととして話を聞くのではなく、ずっと聞いた。聞いた上でお前が抱えている問題には、こういう言葉で配慮して、こういうタイプもあるなあと考え方の提案をした。

今、心身のバランスを崩して困っている人がたくさんいる。私の身近にもそういう人はたくさんいる。

そういう時に、頭ごなしにああだこうだと言うのではなくてまずは耳を傾けてああ、そうなのというふうにじっくりと聞いた上で、でもこんなふうな考え方もあるよとケーススタディを紹介する。

本人はそのときはきょとんとして聞いているかも知れないが、案外ある種の考え方に囚われているときには、その人も今はこういう姿をとっているけれども大丈夫、人々はそれぞれ生きる力を持ち合わせているのだということを信じることである。

私たち自身は人間というのを考えたときに、肉体とか人格として考えたり、社会的な存在として考えたりするが、平均値というか健常者を基準に考えがちである。

そちらの方が多数なので多数派に焦点を合わせた考え方をしがちである。平均値や健常者のスタイルはこういうものだとなつた上で、それから外れるからお前はだめなんだとか言ってしまう。

自分が望んでそうなっているのではないので、そういう状況に置かれているときはそのままの状態、まずはあなたの場合はこうなのですねという呼びかけをして、でもあなたもきっと大丈夫と、その人の可能性を信じて、その人なりの価値の見出し方をすべきではないか。

人間この世に生まれて命に恵まれ、最後は死ぬ。いただいた命を恵みとして感謝して、これは自分だけではなく周りにいる人、接する人、ここにおられる方みんなそうであるが、幸いにして人間として命に恵まれた。だからこれは喜びとして受け止めたらい。

この世には辛いこともあるが楽しいこともある。中江藤樹の考え方、尾藤二洲も近藤篤山もそうだが、この世に命に恵まれて、ちゃんと生きていける力を生

まれながらにして与えられている。その事が楽しいんだという考え方である。では、その力を与えてくれたのは誰かということ、中国の哲学だから「天」である。空ではなくて「天」。そういう天から与えられたものを楽しむというのを、今は野球のチームの名前になっているが、「楽天」という。私たち自身が恵まれたもの。恵まれたものを生かして自分の人生をエンジョイするのが「楽天」。

ぼやっとして、のほほんとした能天気な人を楽天的だというのではない。恵みに感謝して人生を楽しむのを楽天という。これは非常に面白い考え方である。こういう考え方を中江藤樹自身がていねいに説いた。

江戸時代だから身分制社会だが、藤樹の時代はまだ身分制度が固まっていなかった。

藤樹のおじいちゃんは侍だったが、お父さんは農民である。国替えが多かったから、藤樹は米子にも行ったし大洲にも行った。それで小川村にも帰っている。最終的に脱藩して帰ったが、本人は藩からの追及を恐れたのだが、お咎めがなかった。まだ封建社会の仕組みというのはそのようにゆるやかだった。

尾藤二洲とか近藤篤山の時代は江戸の後半期に入るから、社会の仕組みはがんじがらめになっていた。それでも身分制から解放される道筋が二つあった。一つは医者になること。もう一つは学者になること。その場合は武士の家に生まれたからとか農民に生まれたからとかは関係ない。

福沢諭吉、あの人は大分県中津藩の下級武士の家に生まれた。そうすると無能でも自分より上のランクの人にアゴで使われる。諭吉は自伝でものすごい恨みを述べている。でもそういうシステムの中で生まれても、医者と学者の世界に抜け出せば自由である。

中江藤樹、尾藤二洲、近藤篤山そして長野豊山、林 良斉で言うと、この中で社会的に身分が一番上なのは林 良斉だった。藩は小さいが多度津藩の家老である。でもそういう身分とは違う形で活躍できた時代だった。

儒教というのは人間理解としては今述べたような性善説をベースにした人間理解をしていて、私にとってはこの考え方は今でも素敵な考え方だと思う。

しかし江戸期の儒学なり中国の儒教が説き続けてきた教えというのは、時代性もあって、差別を当然とする社会システムを承認する、そういう考え方だった。例えば平塚らいてうが「自分は学問をしたい。今の社会システムの中で女が生きていくのは窮屈でたまらない。人間性を押しつぶされてしまうからいやだ」と言ったが、既存の秩序から抜け出して学ぶというのは大変な勇気。また秩序の側からも非難を受ける。

そういう男尊女卑的な考え方を否定するような考え方は、現実の社会論、社会政策論としては、儒教の中からは歴史的にあまり出てこなかった。

伊予の三人の先哲にしても、彼等が私たちに残したメッセージの中で、何を私たちが良しとして選択するか吟味しないといけない。何もかもが今の時代の我々に勇気を与えてくれるとは限らない。

この三人の中で、尾藤二洲や近藤篤山というのは、女性に対する働きかけ積極的な提言というのは残されていない。江戸の後半で社会の仕組みが男尊女卑でしっかり固まっていて、彼等は男として生まれてきたからそうだった。

ところが中江藤樹の場合は、まだ仕組みがそこまで固まってなかった。それで女性向けの言葉というのをたくさん残している。しかし残してはいるが差別原理というのはずっと付きまとっている。

社会政策論とか制度論は今の社会とは違ったレベルの話が多いが、一人の人間として、この社会でみんなと一緒にどのように働きかけて生きていくかという時の人間理解そのもの。そのところは大いに得るところがある。あるいは学び方の原理、そういうところは非常にあると今も考えている。

現実に関心をおうとする人間が本来持っている、生きる力をどう理解するのかという考え方。儒教は陽明学も朱子学も人は本来それぞれに、その人に相応しいあり方で生きていくだけの力があるんだという考え方である。

それならば、例えば重度障害者の場合はどうするんだという指摘がある。彼等も人として生まれた。自分で選んだわけじゃないけれども運命として、重度障害者として命をいただいてしまっている。

そういう人達は自分からは積極的に社会貢献できない形で命をもらっているが、障害者とか弱者は自分とは無縁だと考えるのではなくて、いったん何かがあれば、あるいは年を取れば自分も弱者になり得る、そういう存在でしかないと考えれば、目の前にいる重度障害者というのも自分と無縁ではない。

そういう障害を持ち合わせていても、それはその人の個性である。個性の尊重を言うときに、マイナスの個性を背負っているというのを無視して、良い個性だけを伸ばしましょうと言いがちである。今は成果主義の時代だからますます言われる。これは基本的に間違っている。健常者を基準に考えるから間違った人間理解になる。

障害は本人の選択とか心がけの問題ではない。そういう人を一人の人間の個性としてありのままに認知し差別しないという事。

私たち自身、自分は幸いに健常者だからそうでない人たちは私たちとは違うのだと考える自分はいないだろうか。機能的に言うなら構わない。それを人格的

におとしめて言う自分がどこかにいないだろうか。そうではなくてそれは個性の違いなのだ。

みんなのものがたまたま誰かのところに表れている。確率的にそこへ出ただけなのだ。そういうふうにと考えたら、さりげない形でゆとりがあれば関心を示して、手を差しのべるということも自然に出来るようになるのではないか。そういうことを含めての性善説である。

共有、共に有ると書いて共有。みんなのものだけでも確率の問題でたまたまそこへ個性として現れた。そう考えれば差別とか余計なおごりから解放されるのではないか。そういうことをはっきり述べたのが中江藤樹である。

藤樹の弟子で非常に頭のゆっくりした男がいた。医者になりたいという。教えても教えても覚えない。100回教えても次の日になったら忘れていく。でも藤樹は諦めないで、この人でも大丈夫と言って最終的に医者にしている。これは偉いと思う。

個人差というのを個性として考える。そういう考え方は早くからあった。今に始まったことではない。何でこういう考え方が起こってくるかというと、それは他者への働きかけ、自分一人で私たちは生きているのではない。みんなの支えや関わりがあって生きていると考えるところから始まる。

昔は生活そのものがシンプルだった。シンプルな社会だからこそ手を携えて生きていこうとする意識が強烈に残ったのかも知れない。

今は閉ざされた環境の中で、お金さえあれば何とでもなるよと横柄に構える考え方が片方ではあるかも知れない。

そういう意味で大都市では「人間は本来、みんなと生きて行くんだ」という考え方は、馬鹿じゃないのかと言われがちである。

皆さんは世界の真ん中はどこだと思うか。これは今自分がいるところだ。自分のいるところが世界の真ん中である。私たちは自分自身が一人一人の主人公として生きるのだから。人に頼まれて皆さんは西条で生きているわけではない。

皆さんが住んでいる場所、今座っているその席が世界の真ん中である。

地域というのは中央に対して言うのではなく、世界の真ん中という意味で言う。西条に住んでいるのであれば、西条の皆さんの家、そして今は皆さんの座っている椅子が世界の真ん中である。

他人のために刺激されて生きているのではない。一人一人がそれぞれ自分の人生の主人公だと、ずっと言い続けてきたのが中江藤樹。藤樹がメッセージとしては一番強いが、尾藤二洲も近藤篤山もそうである。

尾藤二洲は身体障害者だった。歩くのに非常に不自由だった。それでも人間の

可能性というのを自らにも他者にも呼びかけて、真っ当に生きようよ、せっかくいただいた命だからちゃんと生きようよ、というメッセージをたくさん残してくれた人である。

近藤篤山は、昌平黌の先生で残ってくれと言われた。でも、いやだと言った。自分の住むところは川之江、小松、今でいう西条。ここなんだと帰ってきて現地の人と一緒に生きた。見事に生きた。

なんでそうしたかという、この地に生まれた運命を積極的に受け入れたのだ。しょうがないやと受け入れるのではなくて、ここが私の命の場所というように生きた。

一人一人が、自分と他者がどういうふう理解して考えていくかという確認、私たちは自らに対しても、他者に対しても寛容にならないといけない。

ある種の選択をしてその実現にすぐに成果が出るわけではないけれども、なんとか手を携えて凌ごうよと。

寛容になるというのは何でも許すというのではなくて、一緒に手を取り合って目の前にある困難さを何とか乗り越える方向で生きていきましょうねということ。

近藤篤山はそういう意味では、今の我々から考えると非常に悪条件に見舞われながら、生涯を送っている。私は同じような状況におかれたら、ペしゃんこになったかも知れない。心が折れるという言葉をこのごろ使うが、本当に心が折れてへなへなになってしまったかも知れない。

実際そういう場面があったかも知れないが、篤山は凌いでいる。何でだろうと。それはいろんなことがあっても大丈夫だと信じたのだろう。信じるのは絶対ではないが、多分大丈夫だろうと信じた。

神様であれば、この人はパーフェクトであれば絶対信じるとういうのはあり得るかも知れない。しかし自分で自分や隣の人の可能性を信じるときには、信じるけどだめかも知れないという、揺れながら信じていくという生き方なのではないか。

皆さんも日常生活でいろんな課題を抱えていると思う。でもそういう時に暗い方向に考えて備えなければならないこともあるが、なるべく明るく考えた方がいい。

儒教というのは、自分に恵まれた生きる力はきっとあるはずだと信じる意味では、神様、救い主のいない宗教である。信じるというのは科学的に立証できることではないから、これは一方的な宣言になってしまうが。

このような考えの一番根本のところに位置するとして、ここ西条ではこの三人

を挙げているが、三人のまわりに集った人たちがたくさんいた。人は本来善なのだという生きる力、みんなと一緒に声かけながら手を携えて恵みの命を生きて、訪れの時を迎える。そういう生き方をした人たちがいた。そういう意味で大きな役割を果たした人がたまたま名前が残って、今回のような顕彰活動が行われる。

むしろ大事なのは、この人たちの周りに集った人たちである。そういう人たちが実はそれぞれの社会を支えていたのだ。

逆に歴史に名前を残さないことの方が、きちんとした生き方なのかも知れない。人並み外れた負担や責任を背負った人たちが歴史に名前が残ってしまう。そうではなくて、さりげなく見事に生きた人たちというのは記録にあまり残らない。でもそういう人たちが今の私たちの大先輩として、この社会を作ってきている。その意味では先人の教えをモデルに学ぶ動機というのは感謝、そういう考えを残してくれてありがとう、そしてその考え方を生かしながら次の世代にプレゼントするという営みだ。

性善説は唯一ではない。考え方としては世界の歴史の中でも大きな力をもっているが、神様の救いを持ちださないで、人はちゃんと生きることができるという考え方を示した文化遺産でもある。その例としてここに挙げたのが中江藤樹、尾藤二洲、近藤篤山こういう人たちだったということである。

三人それぞれについては、中江藤樹の研究が今一番すすんでいる。専門の研究はいわゆる学者が行うだろうと思うが、でもここで述べられていることの原理は、皆さんも一つの理解として生活の中で生かそうと思えば、あるいは励みを受けるところもあるのではないかと思う。